

ガイド学習（学び合い学習）と仲村貞子

学校現場からの教育改革：想起データ分析（6）

Guide Learning (Learning by Learning) and Sadako Nakamura

Educational Reform Based on Schools: Through Review of Effective Cases (6)

渡邊 規矩郎

Kikuro Watanabe

キーワード：へき地複式教育 ガイド学習 ガイド学習用語集 学び合い 小さい先生 異学年同内容指導
生きる力

I はじめに—研究の概要

1. 教育実践の改革をめざす流れと教育主張

教育のあり方を変革し新しい方向づけをめざす学習理論と実践は少なくない。特に近年、「教育爆発時代」といわれた1970年代から1980年代にかけては、さまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践が試みられた。これらは教育研究集団を形成して教育実践研究を繰り広げ、時の流れの中で消長があるものの、現在の教育実践にも大きな影響を及ぼしている。その代表的なものを取り上げ、その問題意識と提唱されている改革策の概要を検討することにより、今日の学校教育、教育全般の問題点の克服をめざすことができると考える。

独特の教育実践研究を積み上げた教育研究集団は閉鎖集団になりがちであるが、それぞれが持つ学習理論や研究成果を、共通の広い土俵の上に上げて比較検討し、それぞれが示唆するところをわが国の教育界の共通財産としていくことが必要である。現在の学校教育のあり方の何が問題であり、どのような方向へ解決しうるかについて、それぞれの学習理論や実践あるいは教育集団の取り組みが示唆するものは大きいはずである。それらを分析、その成果をもとに、現代における教育改革の課題を明らかにし、改革への具体的な提案を行うことを本研究ではめざしている。

筆者は、1966年以来、教育ジャーナリストとして、教育界に眼を注ぎ、教師教育、教員の資質向上、教育研究のあり方に関心を寄せてきた。特に1970年代から1980年代は、第一線の教育記者として、本研究で聞き取り調査を行う研究者、実践者に直接・間接に接した体験を持つ。従って本研究は、研究者自身の戦後教育実践研究史の追体験、振り返りでもある。先達の学校改革への夢と志を研究し、後に続く現場の実践者にこの「戦後日本の教育遺産」を継承してもらいたいと考える。

教育界においては、絶え間なく、教育の本来のあり方を問い直し、現実の学校教育をどのように改革すればそれに近づけることができるか、ということについての学習理論や試みが続けられてきた。

戦後は、戦前・戦中の教育を全否定、当時のアメリカの教育思潮の影響の下に、いわゆる「戦後新教育」が展開された。そして、1970年代から1980年代の「教育爆発時代」にさまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践

が試みられていった。しかしその後、教育界では、国の大きな教育改革の流れはあるものの、学校をベースにした学習理論や実践的試みは低調になっている。

2. 学校改革の先達の想起データ発表の意義

教育実践の改革をめざす流れについて、梶田叡一は、1970年代の「現代教育主張の総点検」を行っている（『総合教育技術』小学館 1978年4月～1979年3月）。梶田は、明治以来の教育主張の歴史的展開と現代における教育主張の全体状況を概観したあと、「学び方学習」「極地方式」「範例学習」「発見学習」「仮説実験授業」「主体的学習」「バズ学習」「集団学習」「完全習得学習」「教育工学」を取り上げ、それぞれの教育主張とその実際を検討している。本研究では、梶田の研究成果をさらに発展させたいと考え、さしあたり、1970年代から80年代にかけて出現した学習理論の提唱者と学校現場における実践者の双方の代表的人物に聞き取り調査を行ってきている。

学校改革の先達の具体的な提案を含む主張は、学校現場が閉塞状況にあり、教育研究が低調になっている昨今あって、学校教育にのみとどまらず、教育全般の改革にむけての課題を提起し、示唆を与えてくれる。

学校改革の研究者と実践者の想起データは、一定の聞き取り調査後において分析し、学校改革に関する課題や具体的な改善への方法論を明らかにしていく予定であり、本研究の意義は「学校現場からの教育改革：想起データ分析（1）ブルーム理論と梶田叡一」（奈良学園大学紀要第2集 2015, 3, 10）で記した通りである。

近年、学校教育をベースにした学習理論や実践的試みは低調になっている。学校現場では、ハウツーを求め、場あたりの指導に終始しているきらいがある。本研究が学校をベースにしたカリキュラム開発に向けた授業研究、実践研究の興隆に資することになれば、学力の向上は言うまでもなく、これからの新たな学校文化、教育文化の創造に寄与することができると思う。

今までに10数人の聞き取り調査（過去に実施を含む）を行い、想起データとしているが、この想起データそのままでも、貴重なものである。学校改革の研究者と実践者のナマの声は、それ自体が今後、学校改革の歴史及びそれを牽引した先達を研究していく上の素材を提供する意味でも寄与するであろう。

とりあえず、聞き取り調査を終えた想起データを順次発表して、この分野の研究に供したい。

II ガイド学習（学び合い学習）：仲村貞子からの聞き取り

かつて、沖縄・西表島を中心に「ガイド学習」による学び合いを実践して全国的に知られた白浜小学校教師の仲村貞子先生を、仲村先生と同じ白浜小学校に勤務したことがある西村友三郎元校長の案内で平成26年2月13日に西表島を訪ね、その夜、白浜公民館で話をうかがった。

仲村先生は、へき地複式教育の学習法のひとつ「ガイド学習」を北海道に出向いて学び、それを西表島の学校に持ち帰り、異学年に同内容で教える「ガイド学習」に発展させた。「学び合い」は「聞き合い」「認め合い」につながり、離島の子どもたちに「生きる力」を培った。その取り組みは、白浜を舞台に、30数年前に放映されたテレビドラマ『いつも輝いていたあの海』の八千草薫さんが演じた教師のモデルにもなり、授業が紹介された。こうした学習法は、フィンランドでも行われている。また、少子化で複式学級が増加していく今こそ、仲村先生の実践研究の継承が望まれる。仲村先生はインタビュー時は84歳だったが、「授業をしたい。学級を持ちたい」と、教育者魂は衰えるところを知らない。

仲村先生は、北海道で学んだ「ガイド学習」を島の子どもたちに実践、子どもたちの動きに驚き、新たな子どもの姿を発見した。そして、今までの教科書一辺倒の教材研究、子どもの中味が見えなかった複式授業学年別指導を

反省、2学年で同じ内容を一緒に学習していく模索が始まった。当初、複式という言葉にとらわれ、学年別という固定観念に悩んだ。ところが、たまたま社会科の時間で、上級生と下級生が一緒に同内容を学び、それぞれの考え方を言い合い、話し合ったところ、「お姉さんの話を聞いて自分はこんなふうに気づき考えた」と、今でいう学び合いになった。これに自信を得て、「絶対にこれは能力差であって学年・年齢差ではない」と実践を進めた。共同研究を進める中で、「この学習は、お互いが意見を出しての学び合いである」ことを確認、ガイド学習という言葉は使わなくなった。

この点について、仲村先生と同じ白浜小に勤務したことがある西村友三郎元校長は、「ガイド学習は今でも使っている。これが、ハードルが高いため、広がらなかったのではないか。児童がガイドをしたからこそ、今の学び合い学習をはるかにしのいでいた。ガイド学習は、教育センター等では間接指導のガイド（リトルティーチャー）と誤解されるのでガイドをとったらよいと考えた。しかし、よく考えたら、ガイドで進め、狙いを達成させたからこそ、全国に誇れる」と高く評価する。

ガイド学習には、先生の代役を務めるリーダーがおり、「小さい先生」と名付けていた。これでは、この子どもに負担がかかる。教師も「小さい先生」がいるとやりにくい面はあるが、西村元校長は「貞子先生のガイド学習は、ガイドこそ命」という。授業の進行は、毎週、週案をつくり、異学年で学習したときに、片一方の先生がついてないところの学習の内容を記録しておき、当番を決めて授業を進めていった。

「とにかく子どもは変わった」と仲村先生。「本当の僻地で、ものは言わない、言わなくてもわかってもらえる集団だったので、手作りの基本話形の「ガイド学習用語集」を用いて、基礎基本から指導し、最後まで話ができるようにしていった。離島・僻地特有の、小さいころからの子ども達自らのランクづけも打ち破ることができた」と話す。聞き取りに同席して解説・補足を願った西村元校長は、「本当に認め合う学級（支持的風土）がいじめのない学級。いま文部科学省や沖縄県は施策に掲げているが、これをこれにガイドを立てて約40年前から仲村先生はやっている。フィンランドは複式が一般的で、その年間計画も似ているみたいだが、今こそ仲村先生の実践の継承が求められる」と訴えた。

1. 北海道で「ガイド学習」を学び、「学び合い学習」へ発展

渡邊 1970年代の後半から80年にかけて、いろんな研究と実践を組み合わせたものが盛んに行われていました。その時代の研究者や実践家はだんだんと高齢になってきていますし、それを継承することが必要かと思ひ、とりあえず先生方の研究実践のエキスを記録して残しておこう、それを後継の研究者が分析してくれると幸いと思ひまして、橋渡しのつもりで聞き取りに回っているわけです。このことを八重山で校長を務められた西村友三郎先生にお話ししたところ、へき教育で素晴らしい先生がいらっしゃるということで、西村先生に案内していただいております。

仲村 とにかく理論も何もないですからね。子どもたちを相手に、今日よりは明日、明日より明後日と、この子どもたちをどうやってよくしようかと、本当に手探りだったんです。そのとき、私は昭和48年に白浜に来ましたので49年でしたか、職員会でガイド学習を読み合わせしようということで、職員全部で回し読みをした。ガイド学習は北海道の先生がつくられた学習形態ですが、それを読んで、じゃあ北海道の学校に行ってみようということになった。それで、研究教員で行けるようになって、向こうで学校の授業を見て、帰って来てから子どもたちと一緒にやりました。

子どもの動きというのは、大人が考えているようなものじゃない、すごいものを持っていますよね。だからやっ

ていくうちに、今までの教材研究って何だろう、あまりにも教科書にへばりついていて、子どもの中味が見えなかったんですね。複式ではあるけれども、複式という言葉にこだわらないで、異学年でみんなと一緒に学習しましたが、すごい発見がありました。

渡邊 エピソードを含め、思い出せることをお話しいただければと思います。

仲村 私はいつも子どもが変わってほしい、こうあってほしいと思っています。テレビの出始め、宜野湾の小学校にいた頃、テレビ学習討論会ってありますね。あれはすばらしい子どもたちが出されているはずですけど、私の中にはああいう子どもがほしいなと思ってたんです。つまり、人の話を聞いて、すぐそれに反応できる子どもがほしいと思ってやっていたんですが、こっちへ来たらそれとはまた全然別の悩みがあったんですね。

複式という言葉にとらわれて、どうやっていくんだらうか。学年別でやらないといけないという頭があったものですから、非常に悩みました。ある時、社会科の時間ですが、上級生と下級生と一緒に同内容でやったんですよ。そうしたら子どもたちが「先生、一緒にやったら楽しい」と。下学年も上学年もないんですね。「ああ、やっぱり学習って楽しくないといけないわ」と思ったんです。当然、姉さん、兄さんたちの考え方と、自分たちの考え方は、同じ教材であっても全然違いますよね。そこで自分の考え方を話し合っ、言い合っ、そして何々姉さんのお話を聞いて自分はこんなことを気づきました、考えましたと。それに対してこういう考え方になりましたと言う。今でいう学び合いですね。私はこの「合い」という言葉がとても大事だと思うんです。だからそういうふうにして進めてきたんです。研究授業でも、「それでいいのか？」とよく問われました。でも、絶対にこれは学年差じゃない、能力差だ、私たちは能力差であって年齢差じゃない、ということで進んでいったんですよ。「低学年だからわからんはずよ」ではなくて、その低学年は低学年らしく気づいたこと、学んだことを発表するんです。

西表校に行ったとき、1年生と2年生の国語の時間に同内容の「とんびひよろろ」をやったんです。その中でびっくりしたのが、お友達がいろいろと発表するのを聞いて、みんなのものをまとめて1年生がそれを発表しているんです。そして今度は、この学習の中に個人個人じゃなくて、グループをつかって、グループで感じたことを発表してもらう。するとある2年生が、「僕は」という言葉を出したんです。「僕はじゃないでしょうか？ あなた方のグループの名前は何かグループでしょう？ グループの代表でやるんだから、僕はじゃないんじゃないですか？」と、こういうふうな指摘もするんです。何も無いみたいだけれども、この子はしっかり聞いているわけですよ。こういうところも非常に感心したのと、2年生が「とんびひよろろ」のところで発表しながら「発揮」という言葉を使ったんです。またこの子は、Y君に「この発揮というのは何ですか？」と質問したんです。すると、この2年生は「発揮というのは、よし今日僕は一生懸命走るぞ、ありったけの力を出して走ることだ、そういうふうにしてやるのが発揮ということなんだ」と説明しました。「わかりました。ありがとうございます」と相手に感謝の気持ちも出すようになっていた。その子どもたちは非常に粗野で自分勝手なことばかりやっていましたが、お互いに認め合うような性格になって、とてもよかったです。

だから私は、この「学び合い」を上原小学校へ行ってから共同研究でやったんですよ。「これは学び合いなんだね」、「お互いに意見を出しての学び合いなんだね」、「そうだね。強いてガイド学習と使わなくてもいいね」と。ガイド学習となると、学年にリーダーがついて、その1時間の学習をリードしていく子がいるので、先生方は、この子を「小さい先生」とに名付けてしまったんです。この子はその学習の内容をずっと引きずっていく、リードしていくということであって、先生ではないんだけれども、先生方の頭の中には、この子が先生、小さい先生というものの考え方でやっていくから、非常にやりにくかったんじゃないかなと思ったんです。

そして、この学習形態で私は、黒板は全部両学年とも正面を向かせてやりました。同じ方向に向いていると、子

どもたちの動きがみんな見えるから、一緒にしたほうがいい。子どもたちは、先生の話しも聞きながら、また自分たちのリーダーの話しも聞きながら適当にまとめていくんですね。そして、まとめる時にも板書の仕方までこの子たちは指示するんですよ。「今は題目だから、そして次は意見を言ったものは1字下げたほうがいいんじゃないか」とか。そうすると、ノートの書き方も非常によくはなるんです。私はこの「学び合い」というのが出てきたから、助け合い、学び合い、認め合い、この「合い」という言葉でずっとつないでいくと、非常に学習の仕方がよくなるし、最後には認め合って、「今日は誰々さんの言うことを聞いて大変いい勉強になりました」という反省も出てきますので、とてもいいんじゃないかなと思いました。

だから複式は、学年別年齢差じゃなくて、能力差だと。さっき話しましたが、1年生でもあれだけの学習をみんなまとめてやっていけるからね。あちこちで発表した時に、「完全な複式にして異学年で学習したとき、片一方の先生がついてないところの学習の内容、あるいは進行はどうなっているのか」という質問があるんですよ。これに対して私たちは、「毎週、週案をつくって、そこには今日の理科のガイドは誰がやると、みんな当番を決めて記録してありますから大丈夫です」と答えていたんです。

2. 週案をもとにガイド（小さい先生）が学習を進める

西村 先生方は今、学校で週案を書かされていますが、30何年前、週案をつくって子どもたちがやっていた。普通、複式といたら学年別指導。ガイド学習というのは、間接指導のリトルティーチャーといわれているけど、仲村先生のは違う。本当に学習を進める。それを先生は横から見ていて、ポイント、狙いを達成するために、ここはどうしたらいいかをきちっと指導するんですよ。

仲村 私たちは週案をつくってやっていましたから、その週案をいつも金曜日までには仕上げておく。そして来週はこうやって勉強するというでみんなに渡しておくんですよ。

ここは、今よりももっともっとへき地、本当にへき地だったんです。だから明日、石垣で研修があるよといったら、今日の午後2時の船で白浜を出ないといけないんです。2時に出て石垣に着くのは5時。だから、明日の研修が終わったらすぐには帰って来れない。天候の具合で1週間ぐらい帰って来れない場合もあるんですよ。順調にいったら3日ですね。すると、この3日間の学習をどうするか。空けちゃあいけないから、校長先生以下、空いている先生をみんな割り振りするんですよ。教えてもらうというより、いわゆる管理をしていただく。週案を書いてありますから、先生方も、ああこのように進めればいいんだなということをおぼえてくださって、それでガイドがずっと進めていくということで、週案はもうずっと続けていました。

そのうちに、とにかく子どもは変わりました。最初こっちへ来た時期、この子たちにどうやって話しをさせようかと悩んだ。本当のへき地だったんですよ。子どもたちはものを言わない。なぜものを言わないかというと、みんな家族と同じようにお友達ですから、言わなくてもいいんです。来た時期は学習教室を開けばなしでやっていたら、すぐそばに就学しない子どもたちが来て、「ああ、あれ3だよ」、「あれは5だよ」とやっていたんです。パンが来たら給食も一緒に食べるという状態で、本当の家族でしたね。だから、何も言わなくてもわかってもらえる、そんな集団でした。

それともうひとつ困ったことは、こんな小さい部落で、1部落で1校というのは滅多にないですよ。これはいいところもあるけれども、非常に弊害が大きかったんです。「ああ、あれが一番よくできる人、あれが手を挙げないと、僕らは挙げられんな」というふうに、もう決まりきっているんですよ。それじゃあいかんということで、私たちはこれを何とかして解決しようと、いわゆる従来の普通の先生方、ハイハイハイと手を挙げたら、ハイと、こ

れが一番できる、これをすぐ発表させますでしょう、これを私たちはやりませんでした。

みんながどう考えたか、考えたらこういうふうにしましょうとか、サインでやりました。ああ誰か考えているな、今日はこの子に発表してもらわんとと思ってやっていくと、だんだんその子の良さがわかってきますよね。認めますよね。それで他の子たちは、「僕は誰々さんの考え方と同じでした」ということで、同じだったということが非常に喜びなんです。自分も同じだった、成功したという意味でね。そして「全然気づきませんでした」という学習用語も指導してありますので、それでお互いに認め合うし、お互いにほめて、そして励まし合ってやっていくようになり、だいぶ変わりました。1番は1番でなくなったんです。

それに、言葉もしり切れとんぼ。最後まで言わない。それに気づいたのは、職員室も開けばなしですから、「先生、ハイ」と持ってきたんです。「これ拾ってきたの？先生にあげるということなの？」と聞くと、そこで子どもは戸惑いながらも「ああ、なるほど」と思い、「先生、これね落ちていました」と言う。「ああそう、じゃあ、落ちていたら落ちていましたと最後まで言ってよね」と、そういうありふれたことから指導して行って、結局、最後まで話しができるようになったんです。

西村 結局、こういう田舎だから馴れ合いなんですよ。言葉づかいもできない。言うのも専ら単語だけ。それともうひとつランクづけというのがある。小さい頃はこの子が1番、この子が2番、この子はもう絶対にこの子たちに勝てないという、このランクづけ。離島へき地はこれがものすごく大きかった。これを打ち破ったというのが大きいですよ。

仲村 そうですね。あの時は、見えない子どもたちが見えてきたものね。

西村 ちょっと知恵遅れじゃないかと思う子ども、普通と一緒に、それ以上に勉強ができるようになった。仲村先生のクラスの子たちは本当に言葉づかいが丁寧で、大きな声を出し、ハキハキしているし、どこへ出てでも恥ずかしくない言葉をつかう。30何年前から、教室の中ではこういう学習用語というのがあると、先生は教室ではじめをつけられたわけです。

3. 言葉づかいを正すために「ガイド学習用語集」を作成

渡邊 「ガイド学習用語集」というのがそれなのですね。

西村 仲村先生はあの頃からつくっていたんです。今でさえあちこちで学習用語ってあるけれども、30何年前に学習用語をつくっていた。今は「基本話形」とか呼ばれていますが、それでもって学級ではじめをつけさせたんです。先生のクラスの子は全然違った。私は中学でして、「せっかく小学校で育てたのに何で中学校で逆戻りか」と言われました。

仲村 あの頃は併置校ですからね。ガイド学習をやって、6年生が中学校へ行きますでしょう。中学校の社会科の時間に、子どもが「先生、ガイド学習をやるよ」と言うと、「あんなのやっていったら本が終わらん」と先生が言ったと子どもがいうものだから、私はもうびっくりして、「ああ先生方の考え方から変えないといけないな」と思いました。本を教えているからね。本で、教科書で学ぶようにすればいいのに、教科書を教えているから。それで、12月で教科書が全部終わったから「終わり」という先生が出てきたんですよ。子どもたちがどれだけ受け皿があって、どれだけ受けているかがわからないで、とにかくこっちから一方通行でやればいいのかというのでは、テレビやラジオと全く同じ。そういうことじゃあいかなわけで、与えたものがどれだけ子どもに反応あるかを見極めなくてははいけません。

ガイド学習をやっている、「あの人の話しを聞いておかんと」とか「ああ、自分の考え方と違っている。ここ

までは同じですけども、ここからは違います」という言葉も出てきました。だから、この話し合い学習というのはとても大事だと思うんです。したがって、今の学力向上というのは何だろうといつも思うんです。教科書に出てきた字が書けることも大事だと思うんですよ。だけど、人間として、社会人として、あるいはみんなと一緒にコミュニケーションをとる、「一体、自分はどうなっているんだろう」ということでやらないと、「生きる力」というのは出て来ないと思うんです。だから、「生きる力」というのはこれじゃないかなといつも思うんですよ。

渡邊 その頃、「生きて働く学力」ということが叫ばれましたよね。

仲村 だから、この「学ぶ」ということが、本当に「学ぶ」じゃないといけないと思いますね。

西村 最近、文部科学省も沖縄県も、「支持的風土」といって、いま先生が言ったように、認め合い・助け合い、学習でどんなにおかしな意見もバカにしないで尊重して、その言った言葉をどう生かしていこうかと、みんなそういう気持ちになってきた。先生がおっしゃった、本当に認め合う学級、これがいじめのない学級。だから今、文部科学省、沖縄県は施策の中で掲げているわけです。

フィンランドでは複式教育が一般的で、仲村先生がやられたような異学年が同内容を一緒に学んでいるそうですが、先生は、もう30何年前からこれをやっていたらっしゃる。先生は2つの学年の別々の目標をいかに1つにするか、ものすごく悩んで同内容の年間計画を苦勞してつくられた。これは北海道に研修に行かれてからですか？

仲村 北海道に行ってきたからです。

西村 こんながあると習ったわけでしょう？。

4. 学習指導要領を洗い直して異学年が同内容を学ぶ授業を展開

仲村 いえ、皆さんあの時は異内容でした。ガイドは置いてやってましたけど。帰って来てみて、この子たちの言語学習もありますでしょう。もうこれ以上はいかんとということですね。夏休みは学習指導要領を全部洗いざらいし、同内容にするのだったならば、ものの考え方として、低学年スレスレの内容・目標で通してはいけない、下になつたらいけないけれども、目標を上に取り上げるのはいいんじゃないかと考えたんです。そして上学年の目標をつないで、下学年のもつないで、それを全部一覧表にして、「自分はこうしてやりました」と、宮古で研究発表したんです。

それと、算数は、数は、計算はどうなっているんだろうと、指導要領を見て並べるだけでもすごくいい勉強になった。数と計算は1、2年はこうだけれども、じゃあ次の学年はどうなっているんだ。そして、どのように並んでいるんだろうとやっていくと、非常に勉強しやすいし、この子はこの辺が欠けているというのがわかる。そういうふうにして同内容指導の目標を立ててやりました。今はそれができますよね。指導要領には低学年、中学年、高学年とあるでしょう。ああ私は間違っていなかったと思うんです。

これをやって私がびっくりしたのは、ガイドをやっている子どもが、これは特に算数ですが、「今の勉強と似たのが何ページにあるので、それをお家でやってくださいね」と宿題を子どもが与えるんです。先生はそれの宿題は与えてないです。子どもたちは、ガイドの子に「やってくださいね」といって与えられるから、家でやります。

しかし、文章題になったらひっかかりますでしょう。翌朝、入り口から、「先生、昨日、僕は全然わからなかった」と。すぐに開口一番、「あんたはえらいね。わからんところがわかっているなんて、すごい。今日もお土産いっぱいだな」と。わからんところがあつたという気持ちだけで、子どもはもう目がキラキラしているんですよ。もう、これには感心しました。

もうひとつは、5、6年生の国語に月の輪熊があったんですよね。私は猟師に集中、子どもたちも猟師の行動に集中して学習したんです。ところが、この子は成績のいい子じゃないけれども、4年、5年生のときに同じ月の輪熊をやっているの、「先生、去年のノート探したらよ、去年は猟師に向けて自分たちは勉強したけど、今度はお母さん、母熊に目を向けて勉強してみようと思う。だから、みんながどう考えているかとても楽しさ」と言い出したから、私はびっくりしてね。自分の教材研究の不足というのはこんなものかなと思いました。だからいっぱい教えられるところがありました。

渡邊 さっきの宿題ですが、それはガイドがやるように先生が指示されているとか……。

仲村 いえ、言いつけじゃないです。今日勉強したのと同じように、類似問題があるんですよ。練習問題ってね。「そこにあるので調べてきなさいよ」「やってきなさいよ」と。でも、Mがガイドの時は一番いい機器がオーバーヘッドだったんです。そしてトラペンアップが出てきたときにすごく喜んだ。そうしたら教科書パクッとやってから展示できますでしょう。そしてオーバーヘッドをいつも使っていたので、この6年生が算数の時間、そのオーバーヘッドとトラペンを使って、そしてちゃんと指示して説明していたので、「今日の説明とてもよくわかった」とみんな喜んでいました。

だから、やっぱり子どもは子どもじゃない。大人がやっているのを見て、ああこれわかりやすかった、じゃあこれ使おうとかね。また家へ帰っても、明日はガイドだから、よし、こうしたほうがわかりやすかったから、そうしようかと、自分でまた工夫していた。

西村 ガイド学習をやっていると、宿題を出さなくても子どもたちが率先して勉強してくる。明日、自分の意見を言いたい、そうすると勉強してくる。学ぶ楽しさが1人1人にある、本当に理想的な授業ですね。

5. 「K君は金の塊りだよ！」—支持的風土が芽生える

仲村 宿題は出したことはないですね。国語なんか、みんなが一生懸命どの段落とつながりでとやっていると、もう45分で足りなくなる。すると、みんなの意見を聞いて、「先生いいよ。そのまま続けて」というので、2時間分続けてやったことがあるんです。そこで「じゃあどうする？ この国語の時間を2時間使ったから」というと、「いま使った時間を他の時間と交換してください」という。週案があるからどの時間と交換してください、というふうにして、自分たちでその交換の時間も変えていく。そして、それを私がまた時々忘れることがあるんですよ。すると、「先生、何の時間かね。交換されてないよ」と指摘されます。

それと、国語の筆順を私はあまり指導しませんでした。国語を学習した裏の方にちゃんと出ています、といえ、ちゃんと自分でやってきます。そして、「お家に帰ったらテレビは何でもいいから見てもいいよ」と。お家では親から制限されますが、私は「何でも見ていいよ。ただ、見るだけじゃなくて、見て自分はこれに対してどう考えたか、それを書いてきてちょうだい」と言って、5分間作文というのをやりました。長ったらしいものじゃなくて、パッパッパッと書いて。そして習った漢字は必ず入れる。したがって、この子たちが帰るまでには、私には休み時間はなかったです。お茶を飲みに行く暇もなかった。この子たちが出したもの全部、「この漢字もなかった」、「これもなかった」と赤ペンを入れ、つなぎ言葉に全部赤ペンを入れたら、ああこれは直さんといかんものだな、ということで、子どもたちは黙っていても漢字も直してくるし、言葉も直してくる。これはつなぎ言葉だな、というのと、文章を考えるようになりました。

だから、作文を書かすのに一番困ったのは、作文の時間といって、一応、大人の当たり前の仕事としてやったんですよ。したら、1人の子どもがヒューヒュー泣きながら、うつむいて全然やらないんですよ。「どうしたの?」、「ど

んなして書くの？」というから、ああそんなに困っているんだなということで、「はい、みんな鉛筆を置きなさい。先生の後ろにみんなくっついてきて、それで目をつぶって」と言って、目をつぶらせて、それで「はい、ジーとしていてよ。先生、いま時間を測っているから」と言って、2～3分して、「はい、いま何を考えたか。目を開けて先生の手を見た人もいた。それを見て何と思ったか。ハイ、サッと書きなさい」と言ったら、何も側から指示されないで自分の考えを書いて、「ハイ、終了」と、2～3分でやったんですよ。そうして、それを発表させたら、「エエッ、先生これが作文ね」、「そうよ、作文って自分の思ったことを書くのだからね、これが作文よ」と言ってね。

私自身が、相手の受け皿がどんなものか、お皿がどれくらい大きいか、何もわからないからね。やっぱり子どもたちの考えをどう引き出すか。引き出し切れたらとても嬉しいんですよ。

なかでも、とても困った子がいたんですよ。この子は2年までは教室に入っても全然勉強しない。3年になり、私の組になりました。ある時、相手の子どもに対していたずらばかりして、全然学習にならないんです。

「今日は先生はマジで怒っているからね。あんたは、おばあちゃんっ子だったからボンクラボンクラしているけど、絶対にボンクラじゃない。あんたは頭が非常にいいんだから。どうするね、みんなと一緒にやるね？ それとも外に出て遊ぶね？」と聞くと、「やる」と言う。じゃあ「今日は先生と一緒にやろうね」と。

この子は、落ちついて勉強もしないし、なかなか字が読めないんですよ。そしてみんなを帰してから、「今日はこの1行だけ読もうね」と。すると、1行を夕方6時頃までかかってスラスラ読めるようになった。「はい、もう1回」と、何回も読ませました。それで帰りに「先生も一緒に帰ろうね」と言って、そしてばあちゃんに、「ばあちゃん、きょうはこんな悪いことをしたので、おしおきしてやったからね。こっち見てくださいよ。青い痣ができていますが、これは悪いことをしたときにやった。でも今日は、今まで一生懸命勉強したので、おかげでも、この子が好きなものをつくってあげてね。今日は絶対に悪いことじゃないよ。今から勉強すると言ったんだからね。ちゃんとやってくださいね」と言って、遅くなった理由をちゃんとおばあちゃんに連絡してやったんです。

そして翌日、「みんなに聞かせて」と言うと、もう恥ずかしがって聞かせなかったけれども、この1行だけ堂々と読んだんですよ。そうしたら、もう拍手がいっぱいでした。

その子がだんだん勉強してる間に、段落と段落とをつないで考えるようになりました。嬉しくて、「ああ、あんたは全然ボンクラじゃないよ。あんたは金の塊り、金の塊りだよ」と言ったら、お友達もみんな「金の塊り」と言って喜んだ。そして校内の研究大会をやったときにも、その子がもう堂々と発表してすごかった。先生方もみんな感動して、「これ本当に彼が覚えたの？」、「覚えたから言えるんでしょう」と、冗談も飛び交い、あのときはもうすごく嬉しかった。

だから、いつも思うんですね。子どもの頭ってバカにするものじゃない。どんなに考えているかわからない。我々が悪い言葉を言ったのも、どう反応しているのかわからない。だからそれを吐き出させる方法をやらんといかん、といつも思うんです。「いつも鞆にいっぱいお土産はもって帰っていますね。そして必ずあげなさいよ。欲張りになったらいけないよ。相手からお土産をもらったら自分もあげなさいよ」とうふうにしてやってみました。

西村 この子なんか、そのまま中学校に行ったら問題児になってますよね。だから本当に1人も残さず引き上げてあげて、考えさせる。そして学級の中で認め合う。バカにしないで、そしてそれをお互いに励まし合いながらやっていく、支持的風土。今はこれが求められているんです。

仲村 認められてから、Y子たちが「K君は金の塊まりだよ」と、今までバカにしていた子らの見る目や態度が変わっていった。

西村 字も読めなかった子が、丁寧な言葉を使って堂々と話しをしている。沖縄では童話お話意見の発表大会と

いて、年に1回、低学年は童話を読み、高学年はお話を創って発表する。中学生は意見を出す。その童話大会でK君が何か覚えて発表した。字を読みながらね。もうビックリです。

仲村 その童話の本も自分で選んできてます。そしておじいちゃんが出る場面があるんですが、それがなかなか言えない。そのうち「先生、うちのジジイと同じことをやればいいの?」と。「そうだよ。ジジイがいつも言ってる言葉をそのまま、ニュアンスもね」と言ってやっていたら、すばらしい発表になった。「とてもよかったよ」とほめてやりましたが、あときはすごく感動しましたね。

あの頃の白浜の子どもたちは、素晴らしかったね。「この子たちを石垣まで連れて行って研究授業をやってくれ」と私は言われたんですよ。補助金もないし、船は大回りになりますから、とてもじゃないけどそんなことはできないと断りました。すると、へき地大会をこっちでやることになりましたからね。そして、この授業を見てまた、「この子たちを連れてきて石垣でやってちょうだい」と言われた。県の大会のときには県の指導主事がこの子たちの学習を見て、やっぱり、へき地という何もしないという偏見がありますよね。でも、この子たちは堂々としたものね。修学旅行へ行っても、气象台へ行っても、どこへ行ってもどんどん質問するものだから、「へえー、こんな子ども初めてだ」と言っていました。学習でも光っていました。

6. 今もつる「学級を持って授業がしたい」という思い

渡邊 先生がやられた実践の広がりはどうだったんですか?

仲村 みんなに広めようと、ここでも研究授業もやりましたが、なかなか深まらさない。上滑りになって広がらないんです。学習用語までは広められますけどね。

西村 仲村先生はできても、他の先生にはなかなか難しい。学び合いをやれと言っても、本当に質の高い学び合いにはなかなかならない。今でもそうで、同じ課題ですよ。

あの頃は、仲村先生みたいな人がいたからね。でも今そういう人はいないんですよ。今でも先生に授業をしてほしいという依頼がまだできるでしょう?

仲村 上原小学校では、共同研究ということで2カ年続けました。でもチョコチョコと行くだけです。学級を持たせてくれればいいのにねと思った。学級を持つとやっぱり学級目標がありますでしょう。するとじゃあその学級目標を達成するためには、自分たちはどうすればいいか、また、それぞれの学級がありますよね。そして、学級ではこんなことしようねとなって、じゃあ目標を達成するために、私はどうすればいいか、こういうふうな山になりますよね、それを全部前に掲げていて、じゃあ1学期にはどうなったんだろう、2学期はどうなったんだろう、3学期はまたどういう目標に立てるだろうということで、学級を持たせたら学級経営がすごくやりやすいですし、その子たちをずっと見ることができるから、私はまた学級を持たせてほしいなと思いましたね。

西村 やっぱり思いが違うでしょうね。へき地の子どもたちを何とかしないというその強さ。そういう子どもたちと向き合ってずっとやってきた。結局、離島では中学を卒業したらもう親元を離れる。そのときに自分の足でしっかり歩ける。どこへ行っても、先生の原点はやっぱり自立。その自立って何かというと、先生は、人の話を聞いて自分はこうだと考える、要するに思考力ですよ。いま、これが問われる。思考力、判断力、表現力がいわれているが、基本的に子どもたちが社会に出てこういうことができる、これが「生きる力」ですよ。

仲村 話し合いができるならば、この話を聞いておかなければ、次に自分では続かないから、聞き上手にもなるんですよ。だから「学び合い」って「聞き合い」だと言いますね。

西村 だから、今こそ貞子先生の実践が本当に求められているんですよ。だからどこかの学校で学級を持たせて

くれるといい。

仲村 学級を持ちたいです。

7. ひとりひとりを生かそうという願いと質の高い学習

西村 本島の大規模校にいた時から、1人1人を生かそうという思いがあったですね。

仲村 大規模校では40、50名でしょう。だから大変騒々しい。私は鐘が鳴ったらすぐに始めていましたから、騒々しいと、チョークを持ったままジーとして立っておるんですよ。何秒になるか何分になるかわからないけれど、「もうお話終わった？ もういい？」と言って始める。私は「静かにして、静かにして」と大きい声は出しませんでした。

それと、たくさんの子どもたちですから、ややもすると先生は、ハイ、ハイ、ハイと手を挙げた子どもに指名するんですよ。そうすると、遅れている子どもは、先生の目を見たら当てられるからということで、うつむいてばかりいるでしょう。そういうふうにしちゃあいかん、落ちこぼしはだめだということで、私はサインを考えました。「まだです」と「オーケーです」、さらに「いま考え中です」というサインです。初めは時間はかかるけど、子どもたちは真剣になって、あとはスムーズにいきました。そういうふうにして宜野湾小学校でも授業をやったんですよ。

こんなこともありました。原子力というのが国語の本にあったので勉強した。「はい、今日の勉強はこれで終わりです」と、私は当たり前で打ち切ろうとしたんですよ。すると、1人の子が「先生、この原子力って、みんないいことばかり書いてあるけど、悪いことはないの？」と質問したんです。「ああ、すごいな」と思ってね、「あのよ、先生、今日はこれについて勉強してないから、あんた図書館に行って調べてきて、明日発表してね」と言ったら、ちゃんと調べてきて、こんなに大変なものだということをみんなに発表したんですよ。そういう子もいました。あのときは40名学級でしたかね。

西村 もともとそういう子どもを目標にされてたと思うんだけど、それを常に考えていると、それが上手にできるようになってくる。

渡邊 宜野湾からこちらに来られたんですか？

仲村 そうですね。諸見、宜野湾の小学校に10年いましたね。諸見の小学校では、自分の中ではいつでも8時から5時まででは我々の仕事。8時までには学校に行って、登校してくる子どもたちの顔色を見ながら、歩き方でも、「おはようございます」の一声でも、ああこの子は今日は少し変だな、何かあったな、というのが大体わかるから、その顔色を見て受け入れてくれるような体制をとらないといけないと、いつもそれは考えていましたね。

こっちへ来ても、非常に算数の好きな子、頭のいい子がいたんですけどね。何か今日はおかしいねと思って、「夕べ何かあった？」と聞いたら、「お父さんが酒飲んでよ」と始まった。だからそういうふうな家での出来事も、みんな子どもに現れるから、ちゃんと見ておかないといけないし、それに対応せんかったらどうにもならない。

西村 学び合いが本当にできる学級はみんな声が大きくなく、落ついた雰囲気ができる。だから、先生が大きい声を出す学級は一斉指導が多く、学び合いが全然できてないですね。

仲村 よく、「わかりました？」というのがあるでしょう。わからんでもみんながハイと言ったら、それきりでしょう。だからお話を聞いていれば、ああわかったんだね、これぐらいわかったんだね、というのが勉強だから。そして自分も一緒なんですよ。さっき言ったように、「先生は…」という言葉は出さなくて、構成メンバーとして「私はこうだけど、あんたはどう思う？」と投げかけると、食いついてくるんですね。そこから深まっていきます。

そして、自分では予期しないことが、子どもたちから出てきますからね。年上の算数で私はとてもびっくりした。1、2年からすぐに5、6年に行っただしょう。複式の弊害の典型的なものだと思ったんですよ。というのは、片一方は先生がついて、片一方は自分たちでやるものだから、遊んでいるのか、何をしているのかわからない。算数の時間でしたけど、片一方は一生懸命テレビの話をしている。そして、こちらはついてやっていたら、「どうした、できた?」、「全然わからん、どんなしてやるの?」、「はい、出てきた数字を足したり割ったりしなさい。4つあるでしょう、足し算も引き算も」とやったら、本当にそんなにするんですよ。これにはびっくりしたな。今度は、もう答えが合わない。何でもいい数字を入れ換えて、と。それから算数の時間は、文章の読み方、助詞の使い方、「が」とか「を」とか、どういう意味になるかやってみようと言って、それをやったら、やっと自分たちで解けるようになった。

北海道の先生が来たときでした。那覇でのへき地教育研究大会で西表に行こうということで、そして授業を見にいらしたんですよ。そのとき、きちっと「僕は二等辺三角形がわかりません。教えてください」と言った。するとTが出てきて、ちゃんと教えてくれたんですよ。自分で説明もできるようになって、先生方はびっくりしてましたけど、私もあの算数には大変びっくりしました。3学期になったら、「先生、先生の考え方はおかしいよ」と、今度は私がやられました。とにかく私には理論も何もありませんからね。もう試行錯誤です。

西村 いや、理論になってますよ。本を書かなかっただけです。学び合いの本はいっぱい出ているけど、みんなそんなですよ。

仲村 「ガイド」という言葉にひっかかるみたいですね。

西村 「ガイド」というのは、「リトルティーチャー」なんです。今でも学年別指導が中心ですよ。だから半分勉強してないみたいなものです。

仲村 やっぱり同内容指導に入る。だって新聞を教材としてもってきて、一緒に勉強しますでしょう。今そういうふうにしてやっているでしょう。

西村 同じ教材を使っても、次の年に別の視点で勉強する。だから同じことを同じようにやったって意味がないわけです。フィンランドのものにも書いてあったけど、同じのを2年繰り返す。そうして、いま世界のトップクラスになっているわけでしょう。だから同じものでもやっぱり質の高い学びになっている。

仲村 だから、年間計画も今年はこれに重きをおいて◎にして、来年は○で軽く扱う。

西村 フィンランドの年間計画も似ているみたいですね。フィンランドは複式が一般的。わざと複式でやっているらしいですよ。

渡邊 同内容とは同じ内容のことですね。

西村 そうです。学年別。何で学年別をやるかという、結局、今年A年度だと3・4年、この3年の勉強をすると、次の年にまた4年の勉強をするんですよ。同内というのはみんな混ぜるんだけどね。混ぜるとどこかの学校に転校した場合に困る。学年別だと、要するに半分しか勉強しなくても一応教科書は終わった、勉強はしたと、形だけなんですよ。同内容指導には2通りあって、ひとつは2個学年の単元に軽重を付けて1つにして、2年間繰り返すものです。もうひとつは、AB年度学年別指導です。これは、3・4年学級だと、最初に3年の学習をしたら、次年度は4年の学習を一緒にやるものです。学年別の指導も2個学年1つなので、先生は指導しやすいのですが、転校生がいると困ります。3年の時に4年の学習をして都市部に転校すると、この子は3年の学習をしなかったことになります。学年別指導は、児童生徒の出入りがある地域ではできません。同内容指導は、年間計画をつくるのが大変ですが、1年間でねらいは達成でき、2年間繰り返す（全く同じ指導を繰り返すのではない）ので、理

解も深まると思います。

8. 「教科書を」でなく「教科書で」教える

仲村 そうそう、教科書が終わったということですね。

西村 結局、今でもそうなんですよ。本当に力がつけばいいからと言って、先生方が心配するんですよ。力がつけばいいんだと。これまたわからん親は教師が悪いと言って心配する。

仲村 「教科書を」でなく「教科書で」教えればいいんです。例えば国語なら、助詞の使い方だとか段落のとらえ方だとか、そういうものをちゃんとやればいい。

西村 さっき出てきた、字もまともに読めなかったKなんかは、本当に勉強もしないから、地域の人はバカじゃないかと思っていた。Kはみんなから放ったらかしで見放されていたんです。結局、Kは自尊心がないわけですよ、自分はバカだということ。でもそうじゃないよと。だから少しずつ少しずつ根気強さも出てきた。そして僕が見たときは、言葉づかひも丁寧だし、はきはきしていた。残念ながら、おそらく中学校高校へ行って、こういう指導が継続できるという保障がない。この辺がもったいないところですね。本当に小学校の時代は全然問題ない。だからこれからの日本はしっかり継続したものができないといけないです。

仲村 だから私は、学校経営というのがとても大事だと思うんですね。地域で学校目標を立てて、そして職員全部の共通理解があつてというのがないと、中学校へ行って、子どもたちがガイド学習をやるというのに、教科書が終わらんからと先生がすぐに打ち切られたということだね。だから「教科書を」というのと「教科書で」というのと、とても価値が違うと思うんですよ。

西村 先生は、教科書問題とか、いろんな政治問題にも取り組まれています。先生がすごいのは、やっぱり教えることと学校目標の達成ということ。だから、本当に純粋に学校経営の中で自分がこの子どもたちを育てるんだ、そして、1人1人の子どもたちにしっかり力をつけさせるためにはどうしたらいいんだというのは、本当に生涯を掛けての仕事ですね。

だから、ひとつの教材でああいうことをいま言えるというのはすごいと思いますよ。やっぱり全精力を集中してやってきた証じゃないかなと思いますね。それだから、今でも学級を持たせてくれたら授業をしたいと思っておられるんですね。すごいです。

渡邊 いま見てみましたら、昭和4年のお生まれですから84歳ですね。今年誕生日を迎えて85歳になられる。とてもそんなお歳には見えません。

西村 僕よりも2回り上ですね。僕もヘビ年ですよ。だから僕は、若い先生に仲村先生の授業を見せたいんですよ。

仲村 学校目標の話ですが、私が思うには、こういうへき地は転勤が多いでしょう。校長先生がここまでは目標を立てて達成された。そしてここまでは、この学校はよくなった。だが、まだこれこれではできてないからという、そういう引き継ぎがやられているだろうか。そして我々がガイド学習をやるよと、あんなに職員みんな一緒になって放課後ずっと勉強してやってきたのに、それが途切れてしまうからね。「あの人だからできるんだよ」という言葉は聞きたくないですよ。

西村 教育目標というのは、どこも似てるかもしれんけど、こういう子どもたちを育てるんだというのは、校長でもあまり深く考えてないと思いますよ。だから、先生のような人が本当に純粋に教育者なんです。これが大事だと思いますよね。

9. テレビドラマの主演モデルで登場

渡邊 最後に、仲村先生がモデルになったテレビドラマのことを聞かせてください。

西村 フジテレビの『いつも輝いたあの海』はどういう経緯で撮影が決まったんですか。

仲村 どこから出てきたかわかんけれども、県のほうからあったらしい。こういう問題は個人で受けるべきじゃないと私は拒否したんですよ。だけれども電話でしょっちゅうやるからね。じゃあ一応は教育長までいってくださいと。そして、職員会議でも受けるか受けないかでまたもめたんですよ。

西村 僕も体育の時間に出ましたから。僕がちょうど白浜から船浮に行くときの春休みで、僕しかいなかったんですよ。檀ふみも出たんですよ。

渡邊 それは何年頃ですか。

仲村 あれは、Kを持っているときだから、昭和50年頃じゃないですかね。私は昭和48年に来ましたからね。48年は1～2年生、その次は5～6年、そしてその後だからね。

西村 八千草薫が来たのはもっと後ですね。

仲村 O校長のときだったよね。職員会議でこれを受けるかどうかということでもめた。

西村 僕が船浮に行ってるときにも撮影が継続されて、田村高広が船浮の校長だった。

仲村 そうそう、八千草薫が私になって。だから授業もちゃんと見ていた。

西村 スタッフは、脚本を書くためにだいぶ前から来てたわけです。放映されたのは昭和60年ぐらいかもしれない。僕の体育姿が映っているんですよ。

仲村 とても好評で2回放送したとおっしゃってましたよ。視聴率36%と言っていましたもの。

渡邊 また、そういうドラマを教師志望の学生なんかが見るといいですね。

仲村 あのと、監督には「ガイド学習」という言葉は入れんほうがいいと言ったんです。入れるとそれにこだわりすぎるでしょう。

西村 あの頃から「話し合い」じゃないんですよ、「学び合い」、質の高い「学び合い」ですよ。

仲村 学び合いの中に、聞いて上手になってまた話す。そして認め合おう。

西村 これは学習指導要領にも出ていますし、県もこれができればいいじゃない。先生はそれを昔からやっているから。「認め合い」なんですよ。

仲村 やっぱ教師が落ちこぼしても、子どもたちが落ちこぼさないですよ。あれだけは不思議ね。大人は大人の考え方で教えようとするでしょう。子どもたちは自分たちの目線で教えるからね。ああわかったと喜ぶ。

西村 ガイド立てなくてもできる。

仲村 そう、学び合いということであれば。

渡邊 今宵はたいへん貴重なお話を聴かせていただきました。ありがとうございました。